L2としての日本語教室における「ピア内省」活動の可能性
ー話すこと・聞くことに関するタスクデザインに向けてー

金　孝卿

1. 研究の背景

最近の日本語教育を取り巻く社会状況の一つに、留学生や就学生、技術研修生、ビジネスマン、外国人労働者のみならず、中国からの帰国者や定住外国人、外国籍の年少者など様々な背景の外国人が増えてきている現状がある。このような学習者の多様化の現状と共に、第二言語としての日本語教育でも、いわゆる「唯一絶対」の教授法という発想から離れ、学習者を学習の主体と位置付け、学習者が自らの力で学びの道を切り開いていけるよう彼らの学習を支援するという方向へと教育パラダイムの転換が迫られてきた（岡崎・岡崎 1990、2001）。

自ら学習を切り開いていく自律的な学習能力とは、自分の現実における状況とその学習プロセスに関わる様々な要素やそれらと自分との関係を読み取る力であろう。こういった力を養成するための支援方向の一つに、学習者が自分の現実的体験に反省を加える「内省」を教室内外で意図的に促す活動（以下、「内省活動」とする）が挙げられる。

学習における内省について、成人教育や専門家養成のための学習モデルの中で Boud ら（1985）は、「内省とは、個人が自分の体験について新しい理解や評価を見出すために、その体験を探求する認知的・情意的活動（p.19）である」と捉えている。第二言語・外国語教育の文脈では、様々な形で内省活動が実践され、その可能性が検討されてきた。こういった実践研究は、言語学習に関する学習ストラテジー研究の成果にも後押しされたものである。これまでの実践研究の知見を踏まえると、内省活動をより多様な実践に取り入れるためには、具体的な活動デザインや活動デザインの際に考慮すべき観点など、より精緻化された示唆を示す時期に入っていると考える。

本研究では、第二言語としての日本語教室において、特に口頭言語能力（話すこと・聞くこと）の養成に「内省活動」を関わらせる場合に、どのような活動デザインが考えられるかについて検討する。

2.先行研究

活動の形態という点から見た内省活動は、大きく一定の学習活動が終わってひとりで自分の学習を振り返る自己評価型の活動（以下、「セルフ内省」活動と呼ぶ）と、対話によって個人の内省過程に他者の視点を加える相互評価型の活動（以下、「ピア内省」活動とする）の2つに分類できる。

「セルフ内省」活動に関して、ダイアリーやポートフォリオ評価活動のように、学習者が自分の学習体験を定期的にふり返る活動を通して、言語学習と他の学習（自分の専門科目）との関係、言語学習の目標や具体的な学習方略、自己評価、学習行動と結果の関係など、自分の学習プロセスを意識化する上で有効に働く可能性が示唆されている（Donato&Mccormick1995、Nunan1996）。日本語教育の実践研究では、一定の学習活動が終わってから行うような「セルフ内省」活動を、作文や読解、口頭言語能力の養成の場面に応用したものが多い。研究から得られた知見としては、一定の有効性は認められるものの、具体的な言語タスクに対する気づきのレベルに学習者間の個人差が大きいため、その指導効果については一概に言えないという点が指摘されている（石橋ら 1996、石橋 2000、齋藤 1998、橋本 1995、岡部 2001）。

一方、「ピア内省」活動に関して、内省型教員養成に関する研究では「グループ自己評価活動」（青木 2000）や「アドバイス・セッション活動」（金・原 2002）といった対話による内省活動の有効性が示唆されている。また、作文指導における池田（1999）や読解指導における舘岡（2005）など、具

体的な言語能力の養成においても「ピア内省」活動が応用され、それぞれの課題において教育的示唆を得られている。

しかしながら、各活動の可能性はそれぞれの文脈で議論されており、この2つのタイプの活動を関連付けて検討した研究はない。この点に関して、口頭言語能力の養成に関連付けた上記の橋本や岡部の研究では、「セルフ内省」における気づきレベルの個人差を補うものとして「ピア内省」活動の必要性に言及している。しかし、実際に他者との相互行為が個人の内省促進にどのように関与しうるかという点からは明らかにされていない。その他に、口頭言語能力養成に「ピア内省」活動を関わらせた実践研究（倉八 1995）や実践報告（樽田 2000）等が見られるが、いずれも相互行為と内省促進の関係に言及したものはない。

以上の議論を踏まえると、実践と研究に関する課題として、次の2点が考えられる。第1点目に、両タイプの内省活動は、どちらがより有効かという議論よりも、学習の段階に応じて多様な形で組み合わせていくことが望ましいことが考えられる。実際に、小学生の社会科問題解決学習に「内省活動」を取り入れた中川・梅本（2003）の研究からは、両タイプの内省活動を組み合わせることで問題解決過程の理解促進に相乗効果が期待できることが明らかにされている。

第2点目に、具体的な課題の特徴を考慮し、それに応じた活動デザインを工夫する必要がある。本研究で対象とする口頭言語能力の養成に関する言語タスク（例えば、スピーチ等の口頭発表）は、読解のように帰着するモデル（テキスト）はなく、ゴールが特定化されない産出課題である。ゴールが特定化されない産出課題を話し合いの題材にするという点では、作文課題と類似しているが、作文に比べ産出課題をテキスト化しにくいという点では異なる。

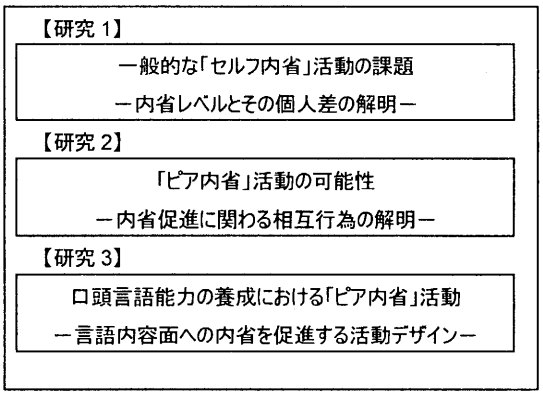
また、これらの課題は相手との相互行為によって成り立つコミュニケーションの一形式であるという点を想起すれば、ひとりで行う「セルフ内省」活動で、気づきの範囲やレベルが言語の形式面に偏ったり、表層レベルの気づきに留まってしまうことは十分に推測できることであろう。

3.研究の目的

本研究の目的は、L2 としての日本語（話す・聞く）教室における「ピア内省」活動の可能性を明らかにし活動デザインの提案を試みる。具体的には、次の2点に注目する。

1. 「ピア内省」活動は、一般的な「セルフ内省」活動における課題（内省レベルの個人差）をどのように補えるか（研究1と研究2）。
2. 「ピア内省」活動は、口頭言語能力（言語の形式と内容）の獲得に関わる内省の促進に貢献できるか（研究2と研究3）。

図1. 本研究の主な流れ



4. 研究1

【研究目的】具体的な言語能力の養成に一般的な「セルフ内省」活動を関わらせた場合の課題として、学習者の内省レベルの個人差を解明し、「ピア内省」活動導入の必要性を検討する。

4.1 手続き

【対象】中上級会話クラス（1学期）で毎回の授業後に自由記述式の内省シートを記入する形式で「セルフ内省」活動を実施した。当クラスに参加した9名のデータを取り上げる。【分析方法】学習者の内省データ（記述された発言）を対象に、内省のレベルはどのように表れるかという点から内容分析を行った。

4.2 結果と示唆

本研究における「内省」の定義に基づき、学習プロセスにおける様々な要素間の関係性をいかに読み取っているかという点から、内省のレベルと個人差が明らかにできた。

分析の結果、学習者は学習の様々な側面に観察の眼を向け、実際に体験している自分の認知行為や思考とそれらの要素とを関連付けて評価、解釈していることが明らかになった。また、内省レベルの個人差は、内省の対象が広いか狭いか、また要素と要素との関係性を読み取れているかどうかという点から

示された。この結果から、口頭言語能力の獲得に関わる方向性を示した内省活動の必要性を提案した（金 2004a）。

5.研究 2

【研究目的】「ピア内省」活動を内省レベルの個人差を考慮したものとして捉えた上で、内省を促進する相互行為にはどのような要素が関わっているかという点から、「ピア内省」活動の可能性を検討する。

5.1 手続き

【対象】中上級会話クラス（1 学期）でスピーチ活動に「ピア内省」活動を取り入れて実施した。当クラスに参加した 6 名の相互行為データを取り上げる。【分析方法】学習者同士（ペア）で行うアドバイスセッションのやり取りを対象に、個々人の内省を促進する相互行為には何が関わっているかという点から分析を行った。

5.2 結果と示唆

先ず、ペアのやり取りで内省がうまくいく場面とうまくいかない場面を分け、相互行為における内省のプロセスを分析した。その結果、内省がうまく促進される場面においては、相互行為において、話し合いで共有される情報から、それぞれの認識や知識とのズレが発見され、そこから更に自分の学習課題に焦点化していくといったプロセスを経ていることが明らかになった。この結果から、内省を促進する相互行為には、「情報の共有」と「具体的な指摘」が関わっていることが分かった。また、この共有される情報の内容と具体的な指摘とは深く関わっていることも分かった。この結果を踏まえ、「ピア内省」活動のデザインにおいて、学習者の内省レベルの個人差をお互いの内省促進に建設的に働かせるための要素を示すことができた（金 2004b、金ほか 2005）。

6. 研究 3

【研究目的】口頭言語能力の養成を目指す場合、内省の対象が言語の形式面のみならず言語の内容面にも踏み込んだ活動デザインが望まれる。本研究では、研究発表に引き続く「質疑・応答」活動を内省活動として捉え直し、言語の内容面への内省促進の可能性を示す。さらに、話し手と聞き手両方の内省促進に貢献できる活動デザインの提案を試みる。

6.1 手続き

【対象】中上級会話クラス（1 学期／12 名）で、研究発表とそれに引き続く「質疑・応答」活動を実施した。当該の活動に参加した 5 名のデータを取り上げる。【分析観点】研究発表後の質疑・応答活動における発話（文字化資料）を対象に、「質疑・応答」によって、内容面の内省はどのように促されているかという点からやり取りを分析した。

6.2 結果と示唆

分析の結果、質疑・応答の場面では、内容面に関する 3 つの側面（背景や前提・用語の意味・分析観点の妥当性）が議論の対象となっており、研究発表における批判的思考力の養成に貢献できるという点が示唆された。また、これらの内容面に対する内省の促進に、「質疑・応答」におけるやり取りがどう関わっていたかについて、協働学習という観点から考察を試みた。さらに、聴衆による他者評価の内容を分析した結果から、この「質疑・応答」活動が、話し手（発表者）だけでなく聞き手（聴衆）の内省をも促進する可能性が示された。これらの結果を踏まえ、口頭言語能力の養成において、言語の内容面に関わる「ピア内省」活動の可能性と活動デザインに向けての示唆を示した。

参照文献

青木ひろみ(2000)「自律学習を促す自己評価活動－認知的アプローチを取り入れた日本語教育実習指導の試み－」『日本語教育論集 16』国立国語研究所　日本語教育センター，65-85

池田玲子（1999）「ピア· レスポンスが可能にすること－中級学習者の場合－」『世界の日本語教育』9、p.29-43

石橋玲子（2000）「日本語学習者の作文におけるモニター能力－産出作文の自己訂正から－」『日本語教育』106 号，56-65

石橋玲子・大塚淳子・鈴木紀子・八若寿美子（1996）「中級日本語学習者の自律的学習に向けての意識化の試み」『言語文化と日本語教育』11 号，62-73

岡崎敏雄・岡崎眸（1990）『日本語教育における個ミュニカティブ・アプローチ』凡人者

岡崎眸・岡崎敏雄（2001）『日本語教育における学習の分析とデザイン 言語習得過程の視点から見た日本語教育』 凡人社

岡部真理子（2001）「日本語学習者の話しことばについての自己評価とその視点－日本での長期滞在経験のある学習者の場合－」『日本語教育論集 17』国立国語研究所　日本語教育センター，55－76

金孝卿（2004a）「日本語（話す・聞く）教室における「内省的活動」の可能性－教室活動のタイプと意識の表れの関係に関する一考察－」『言語文化と日本語教育』27 号、お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 179 - 210

金孝卿（2004b）「セルフ内省」と「ピア内省」を組み合わせた「内省的活動」の可能性－日本語の話す・聞くことを指導する授業実践の事例から－」『日本学報』59 号、韓国日本学会，59 - 74

金孝卿・舘岡洋子・牛窪隆太・丸山伊津紀・池田玲子（2005）「協働学習における教師の役割と教室デザイン－創発を引き起こす「内省」について考える－」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、於：横浜国立大学，259-270、

倉八順子（1995）「スピーチ指導におけるフィードバックが情意面に及ぼす効果」『日本語教育』89 号、日本語教育学会，39－51

斎藤ひろみ（1998）「自律的学習能力を養うために教師は何ができるか」『言語文化と日本語教育』16、お茶の水女子大学　日本言語文化学研究会，1-11

樽田ミエ子（2000）「実践報告 中上級学習者のための聞き手を意識したスピーチ指導の試み－即席スピーチと評価スピーチ－」東海大学紀要 留学性教育センター 第 20 号，45-55

舘岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ－日本語学習者の読解過程と対話的協働学習－』東海大学出版会

中川恵正･梅本明宏（2003）「モニタリング自己評価を用いた教授法の社会科問題解決学習に及ぼす促進効果の分析」『教育心理学研究』51，431-442

橋本博子（1995）「自己評価能力の育成：オーストラリアの元交換留学生の話しことばについて」『日本語教育論集 12』国立国語研究所　日本語教育センター，20-39

Boud, D., Keough, R. and Walker, D.(eds)(1985) *reflection : turning experience into learning.* London: Kogan Page.

Donato, R. and Mccormick, D.(1995) A Sociocultural Perspective on Language Learning Strategies: The Role of Mediation. *The Modern Language Journal*, 78, iv, 453-464

Little, D.(2000)Learner Autonomy and Human Interdependence: some Theoretical and Practical Consequences of a Social-Interactive view of Cognition, Learning and Language. In Sinclair, B., McGrath, I. and Lamb, T.(eds) *Learner Autonomy, Teacher Autonomy: Future Directions.* London: Longman.14-23

Nunan, D(1996) Learner Strategy Training in the Classroom: An Action Research Study. *TESOL JOURNAL* Autumn, 35-41

きむ　ひょぎょん／お茶の水女子大学大学院　応用日本言語論講座
hyo_kyoung@hotmail.com